主体的な追究を促す小学校社会科の授業づくり

-社会的な見方・考え方を働かせることを通して-

高橋　大貴（教育実践コース）

1．探究課題の設定

(1)　入学時の課題意識

学部時代の教育実習において、何度か社会科の授業を実践してきた。そこでは、「学習課題を子どもから引き出すと授業が上手く行く」という言葉を何度か耳にしてきた。しかし、いざ実践してみると、学習課題を自分から設定してしまうことが多かった。また、子どもから学習課題を引き出せたとしても、その後は教師による一方的な説明が多くなってしまう、という課題も残った。

(2)　「主体的な学び」について～探究テーマの設定～

上記の課題意識を踏まえ、「学習課題を子どもから引き出す授業」や「子ども自身が考え、主体的に学ぶ授業」を目指そうと考えるようになった。そこで、新学習指導要領(平成 29 年告示)に定められている「主体的・対話的で深い学び」より、「主体的な学び」に着目し、探究していくことにした。『小学校学習指導要領　解説　社会編』(平成 29 年告示　文部科学省編)によると、「児童生徒が学習課題を把握しその解決への見通しをもつことが必要」とされている。それを踏まえ、「学習課題を把握するための手立て」「解決への見通しをもつための手立て」について、附属新潟小学校での授業観察を通して、以下の 3 点にまとめた。

①学習課題を把握するための手立て→既習や生活経験とのズレ
②解決への見通しをもつための手立て→既習や生活経験を生かして、予想を立てる
③解決への見通しをもつための手立て→子ども自身が「調べ方」を決定する

学習課題を把握し、追究への見通しをもった上で何をするか?『小学校学習指導要領解説　社会編』が掲げる学習プロセスに「追究」がある。本研究では、「追究」について、「子ども自身が資料にあたり、そこから新たな発見を得ていく姿」と考える。①～③の手立てを通して、そのような姿を促すことを探究テーマとする。

(3)　「社会的な見方・考え方」について

「追究」を促すにあたって、子どもがどのような資質・能力を発揮すればよいか?『小学校学習指導要領　解説　社会編』では、「追究」のために「社会的な見方・考え方を働かせる」ことが述べられている。

『小学校　学習指導要領　解説　社会編』によると、「社会的な見方・考え方」は小学校社会科～高等学校地理歴史公民科を通して、一貫して鍛えられていくものになっている。中でも、それぞれの発達段階に応じ、「社会的事象の見方・考え方」を働かせることが大事になってくる。

「追究を促すための手立て」、「追究」にあたって発揮させたい「社会的な見方・考え方」について、授業観察や『小学校学習指導要領　解説　社会編』から得たものをもと

に、筆者は次のように考えた。

「授業で出会わせたい事象(未知)」が「既習や生活経験によって獲得した知識(既知)」へと変化していく中で、「追究を促すための手立て」や「社会的な見方・考え方」が必要になってくる。

既知は子どもにとって「はっきりと見える」が、未知は「ぼんやりとした」状態である。その「ぼんやりとした状態」である未知が「はっきりと見える」ように、(教師の)「追究を促すための手立て」や(子どもが)「社会的な見方・考え方」を働かせることが必要となってくる。

２.検証授業 A の実践～「AI と社会の関わり」(単元名「I(AI)にできることはまだあるかい～変わり続ける!?私たちの未来～」)をテーマとして

第 2 期において、「AI と社会の関わり」をテーマとした開発単元(単元名「I(AI)にできることはまだあるかい～変わり続ける!?私たちの未来～」、全 3 時間)の実践を行った。第 2 章では、それにおける構想・実践・省察について述べる。

(1)　社会的な見方・考え方と資質・能力

第 1 章にて、子どもが「社会的な見方・考え方」を働かせていくことで、新しい社会的事象に出会い、さらに既知のレンズがはっきりしてくると述べた。

このようなことを繰り返していくことで、子どもにどのような資質・能力が備わっていくのか?

『小学校学習指導要領　解説　社会編』を参照すると、子どもが「社会的な見方・考え方」を働かせることで、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指す」と書かれてある。

現代の社会情勢に目を向けてみると、グローバル化・少子高齢化や過疎化、AI の進展、環境問題など現代社会は、先人たちが経験したことのない社会の変化に直面している。そういった時代の中で、「社会が抱える課題を見出し、それに主体的に向き合い続ける資質・能力」が「社会の形成者としての資質・能力」であると筆者は考えた。

そのような資質・能力を育むべく、子どもが社会的事象との出会いの中で学習課題を把握し、社会的な見方・考え方を働かせ、追究へ向かっていくことを目指す。

(2)　単元の構想

筆者は、「社会の課題に向き合い続ける資質・能力をもつために、資料を通して、問いをもち、社会的な見方・考え方を働かせ、主体的に追究できる子ども」を育成すべく、AI と社会の関わりをテーマとした授業を構想した。目指す姿について、本実践では、以下の姿から描くことができる。

(a)既習や生活経験とズレのある資料から、問いをもつことができる子ども

(b)資料から分かった事実を基に、「どのように捉えたか」視点や立場を明確にし、そこから自分の意見を表現できる子ども

上記で設定した、子どもの姿を実現するため、以下のような手立てを構想した。

(a)「常識的なものの見方」と「事実」とのズレから、問いをもつことができるようにするために、相反する事実を提示する。

(b)資料から分かった事実を基に、「どのように捉えたか」視点や立場を明確にし、そこから自分の意見を表現できるようにするた

め、三角ロジックを活用する。

(3)　成果と課題

「常識的なものの見方」と「事実」とのズレから、子どもが問いをもち、学習課題を設定することができた。そして、既に予想を始めている子どももいた。また、三角ロジックを活用して、資料から分かったことを基に、「AI との向き合い方」を論理的に子どもが述べることができた。しかし、次のような課題が残った。

子どもが何の見通しもないまま、教師から「今から、調べてもらいたいことがあります」という指示のもと、資料を与えられていることである。これを第 3 章以降の探究課題としていく。

３. 新たな探究課題の発見と検証授業 B に向けた教材研究

(1)　新たな探究課題の発見

第 2 章の実践における課題を、筆者の授業づくりにおける考え方から探る。学部時代から聞いてきた。そうすることで、子どもは関心をもち、自然と追究が生まれるものだと考えていた。導入の場面でズレや驚きのある資料提示ばかり考えていた。この考え方で行くと、「学習課題を引き出す＝ズレに気づく」ということであり、追究することが目的になっていない。学習課題が子どもの中に成立するということの本当の意味は、「子どもが、追究すべきことは何か、どのようにして追究していけばいいのか、という見通しをもてること」である。そのために必要になるのが「学習課題を引き出す＝ゴールに向かう見通しをもつ」という考え方である。

(2)　主体的な追究のプロセス

第 2 章における省察は、　「資料を提示して分かったことをまとめさせるだけの授業」になってしまった。子どもからすれば、「資料から読み取ったことをまとめた」だけで、実際に「社会的な見方・考え方」を働かせたわけではない。また、子ども同士の意見について、筆者が強引につなげる・まとめるといったこともあった。

「社会的な見方・考え方」は「見方」（位置や空間的な広がり・時期や時間の経過・事象や人々の相互関係。以下、これらに着目することを「見方を働かせる」と表現する。）と「考え方」（比較・分類・総合する・生活と関連付ける。以下、これらを「考え方を働かせる」と表現する。）に分類することができる。（『見方・考え方　社会科編』澤井陽介、加藤寿朗　東洋館出版社 2017）

さらに、平成 28 年中央教育審議会社会・地理歴史・公民 WG を踏まえ、「主体的な追究」のプロセスとして、①「見方」を働かせる→②実際に調べ活動を行う→③調べ活動を行う→④考え方を働かせる→⑤学習課題に対する答えをつくる、と設定した。

(3)　地域の課題を授業の題材に

①地域の課題を探る

上記の授業改善のポイント、授業づくりの課題に取り組むために、4 年生社会科内容「地域で受け継がれてきたもの」（教育出版小学社会 4　平成 31 年検定）を受けて、伝統を「受け継ぐ」ことを課題とする授業を構想・実践・評価することを第 3 期以降の探究課題とした。実習校である亀田小学校区には、商店街や岩万燈、木遣りなど古くから残るものがある。その一方で、商店街の衰退や少子高齢化、さらにコロナ禍で亀田まつりが中止となるなどの課題もある。

(2020.6.17　お茶の立川屋にて　岩万燈保存会総取締役　立川義浩氏のお母様へのインタビューを基に)

②地域の伝統を未来へ向けて受け継ぐための取組

近年、地域が抱える課題がある一方で、地域の方々によって、「古くから残るもの」を受け継ぐための取組が行われている。それが、岩万燈保存会による、岩万燈の担ぎ手を増やすための取組だ。岩万燈は、戦前に一度中止となったものの、1975年に、立川重衛氏らによって復活、現在に至っている。(『亀田大岩万燈復活 40 年記念誌　復活への思いを引き継いで』2016　亀田商工会議所青年部)しかし、復活後、岩万燈の担ぎ手の人数は減少の一途を辿っていた。その後、岩万燈保存会が発足。岩万燈の担ぎ手を増やすために、袋津、沼垂、古町、新津などの他地域への呼びかけを行っていることが分かった。(2020.9.24　新潟市立亀田小学校にて岩万燈保存会　本間満氏のお話より)

4.検証授業Bの実践～「地域の伝統を未来へ受け継ぐための人々の取組」をテーマとして～

「岩万燈を受け継いでいく人々の取組と願い」について、1時間の授業実践を行った。

(1)　授業の構想

「社会的な見方・考え方」を働かせ、主体的に追究できるようにするために、目指す姿を以下のように設定した。

(a)地域の伝統行事に興味・関心をもち、伝統を受け継ぐための人々の取組や願いを追究する意欲をもつ子ども

(b)「調べたい」「考えたい」という意識をもって、学習課題を具体的に設定できる子ども

(c)学習課題を解決するために、仮説(予想)を設定し、解決への見通しをもつ子ども

(d)仮説の検証のために、資料の読み取りを基に、自他の考えをつなげて、理解を深められる子ども

上記で設定した、子どもの姿を目指すべく、以下の手立てを構想した。

(a)地域の伝統行事に対する学習への意欲づけをするために、子どもの生活経験と伝統行事を結び付ける手立てを講じる。

(b)「調べたい」「考えたい」という意識をもって、学習課題を具体的に設定できるために、事象の変化の具合を段階的に提示する。

(c)学習課題を解決するために、仮説(予想)を設定し、解決への見通しをもつために、まず、個人で、次に、近くの人と話し合う活動を組織する。

(d)資料の読み取りを基に、自他の考えをつなげて、理解を深められるために、聞き取った内容を、文章や関係図に可視化して提示する。

(2)　実践と省察

生活経験を引き出す問いをしたことや、事象の変化を段階的に提示したこと、予想を立てる場面を設定したことで、子どもの考えを引き出すことができた。しかし、自他の考えをつなげることや予想を検証するための資料が、子どもの思考とつながりがないまま終わってしまった。

5.2年間の学びの総括

○　今後の展望

今後の授業づくりにおいて、対話に着目し、「子どもが資料をどう読み取るか」といった視点で構想したい。